資料をめぐる旅

横井香織 / 静岡県立大学グローバル地域センター 特任准教授

初めて台湾の地を踏んだのは、2001年夏のことでした。当時、私は高校の教員をしており、外務省の外郭団体である交流協会のフェローを得て、夏休みの33日間を台湾師範大学受け入れの研究者として台北で過ごすことになったのです。テーマは「日本統治期の台湾における南支南洋調査活動の展開」でした。交流協会の担当者は、中国語ができない私を見て中国語の学校に入学することを勧め、翌日から午前中は中国語の学校へ、午後は大学などの図書館へ資料収集に出かける、という生活が始まりました。あらかじめ準備していた『台湾大学旧蔵日文台湾資料目録』や『国立中央図書館台湾分館日文台湾資料目録』などをたよりに、来る日も来る日も図書館で資料を探し、必要と思われる文献をコピーしました。探していたのは、台湾総督官房調査課が刊行した250点以上の調査報告書が中心でした。この調査報告書すべてを所蔵している機関は、日本にも台湾にもありません。ですから、国内だけでなく台湾の大学や図書館、資料館を訪れる必要があったのです。いくつかの図書館、資料館をはしごして、大量のコピーを持ち帰り、宿舎近くの印刷所に製本を依頼する日々が続きました。

台湾総督官房調査課の資料収集が一段落したある日、台湾総督府と関わりの深い台北高等商業学校の資料を見に行きました。台北高等商業学校は戦後、台湾省立法商学院、さらに台湾大学法学院となり、台北市幸町にある高商時代の校舎や図書館などの建物がそのまま利用されていました。つまり、台北高等商業学校附属図書館が台湾大学法学院附属図書館となっていたわけです。図書館は、地下1階、地上2階建てで、1階と2階の間に鍵のかかる中2階の部屋がありました。私が見たい資料の大部分は、この中2階の資料室に所蔵されていました。図書館の責任者は、毎日やってくる日本人が、この部屋の鍵を開けて埃だらけになった古い資料を見たいということに、難色を示しました。しかし、ここであきらめるわけにはいきません。研究のために必要だからと懇願し、無理やり許可を得ていました。幸いにも、図書館の司書や職員の方々は親切で協力的でした。今、手元にある台北高商文芸部の機関誌『鵬翼』や南支南洋経済研究会編『南支南洋研究』などは、このとき入手したものです。

33日間の台湾資料調査を終えて帰国したのちは、国内で台北高商関係資料を収集しようと、旧高商系の大学附属図書館へ何度も足を運びました。そのような中、2007年の春先だったでしょうか。立命館大学の金丸裕一先生の紹介で、滋賀大学経済経営研究所をお訪ねし、初めて阿部安成先生や江竜美子さんにお目にかかりました。それから16年、何度となくワークショップや研究会などに参加させていただき、植民地台湾に関わる資料も閲覧させていただきました。経済経営研究所には台湾総督府各部局をはじめ、台北高商、台湾銀行、地方都市の統計書にいたるまで所蔵されており、ここでしか閲覧できない資料もありました。この他、私が注目した資料に「学校一覧」コレクションがあります。「学校一覧」は各学校の輪郭を把握するために、欠かせない資料です。研究所には、戦前の「内地」「外地」諸学校の「学校一覧」が時系列で整理、保存されています。台北高商を論じるとき、台北以外の高商は、あるいはほかの専門学校はどうだったのか、そういう観点が常に必要です。「学校一覧」コレクションは、貴重な、なくてはならない資料群だと思いました。

資料をめぐる旅をふり返るとき、何度も現地へ赴くことの意味は何だったのかと考えさせられます。10数年前から資料のデジタル化が進み、パソコンの前でデジタル資料を活用して研究を進めることが可能になりました。台湾の資料も同様で、図書館への登録さえできれば、日本から資料の検索ができます。確かに便利になりましたが、パソコンの画面に見る資料からは、高商が存在した当時の風土や文化を感じとることはできません。台北市内に残る日本統治時代の建築を訪ねて歩き、建築遺産の中にその時代の表情を見ることは、高商資料を読みすすめるうえで大きな助けとなりました。また、資料の収集を通して、国内外の研究者やアーキビストの方々と交流したことも、研究を進める力となりました。高商史研究は一人の研究者の手に負えるものではなく、共同研究が不可欠です。今後、共同研究グループの一員として、「内地」「外地」に設立された高商史研究を深め、新たな高商像を描くことができればと考えています。